# 聞名仏教

第 182 号　　毎月発行
（発行日）2025 年 11 月 1 日
発行所：真宗大谷派念佛寺
〒 663-8113 西宮市甲子園口２丁目７－２０
JR 甲子園口駅下車歩 4 分
電話（**0798・63・4488**）
（発行人）土井紀明
http://nenbutsuji.info/
アドレス nenbutuji6@gmail.com
ゆうちょ銀行（ドイノリアキ）
記号 17810　番号 7259431

《 聞法会ご案内 》

○〈同朋の会〉
毎月２２日 午後２時始
（8 月は休みます）
○〈念仏座談会〉8 月は休み
毎月 12 日午後 3 時始
○〈「聞名の会」法話・座談〉
毎月 6 日午後 7 時始
○〈真宗入門講座〉（副住職担当）
毎月 18 日午後 6 時 30 分始

## こころざしは誰へ

佐々木蓮麿

津久見市に蓮照寺という真宗大谷派の寺院がありますが、その先代に古谷晃という住職がおられました。彼は非常に正義感が強く、また仏祖崇敬の念が厚い方でありました。

あるとき一人の檀家の者が住職の古谷師に向って「先日、役僧さんの某に永代経の志をことづけておきましたが、確かにあなたの手元に届きましたでしょうか」と尋ねたところ、古谷師は言下に「おまえは誰に志を上げたつもりか、仏に捧げたのか、それとも住職の私にくれたのか？」と問いつめられたので、この檀家の主人は「そりゃ仏様に上げたのでございます」と答えたところ、師は「仏様に上げたのであれば、その金は誰に渡したにしろ、仏に捧げようと思い立った一念のときに、仏に届いているのだ。その金が誰の手に渡り、どう使われようと、おまえの仏とのやりとりには、何らの支障はないわけである。もし、役僧が、その金を自分のフトコロに入れたとすれば、その罪は役僧にある。また、住職の私が手にとって自分勝手に使ったとすれば、その罪は住職のわたしにあるのだ。おまえの仏に捧げた志は、少しもキズ着けられないのだ。お前が、そんなことを疑うのは、仏を殺しているというものだ。志の金を住職の手元に届けなかった罪よりも、仏を殺す罪の方が大きいぞ」といましめたので、その門徒も初めて信心の世界に目ざめ、以後は無記名献金をすることに大きな喜びをもったということであります。

この古谷師は、愛山護法の精神に燃え、本山の会合にでられたことがありましたが、その内部の見苦しさにあきれ、以後、全く宗政に関与することを厭い、専ら自坊を守っておられましたが、仏祖の崇敬、境内の清掃などは、実に住職の手本とするに足るものがありました。その頃、蓮照寺の本堂に参って、銘香の薫じわたっているのに気づかぬ人はなかったといわれております。京都のある薫香商に聞くと、全国の末寺の中で、上等の香類を沢山買われる寺は津久見の蓮照寺が一番だ、ともらしたそうであります。

ある人が、古谷師に向って「あなたは随分上等の薫香を仏前に惜し気もなくたかれるそうですが、一ヵ年の香代は相当多額なものでしょう」と言ったところ、古谷師の返答がふるっております。「いや大したことはありませんよ、住職の食費に比べたらもったいないほど安いものです」と。この一言でも師の仏祖崇敬の気持が読めると思います。

戦時中、法中が集まって、戦死者の夜伽の晩に白骨のお文を読むのは、どうも不適当のように思われると話し合っていたところ、師はそれを聞いて一言のもとに「君らは時世の風潮に流されて、仏教の何ものかを知らぬ、そんなことで本当の布教ができると思っておるのか」と叱りつけたので、一同は全く二の句がなかったということであります。これこそ筋金の通った住職というべきでしょう。

（『安心清話』より）

（了）

《念佛寺報恩講》

十二月二十二日（月）午後二時始

講師　滋賀県　瓜生崇 先生

＊なお同日十二月二十二日は午前十時より勤行・法話（念佛寺住職）があります。ご自由にお参りください。

# 「極重悪人唯称仏」について

真宗大谷派の難波別院から発行されています「教化リーフレット」に「極重悪人唯称仏」と題しまして一ぶん文を書かせていただきました。これに沿って少しお話をさせていただきます。

この「極重悪人唯称仏」というお言葉は正信偈の源信章に「極重悪人唯称仏　我亦在彼摂取中　煩悩障眼雖不見　大悲無倦常照我」という一連の中の一句です。「極重の悪人よ、ただ仏を称えよ」という阿弥陀仏の仰せは、また釈尊のお勧めでもあります。極重の悪人とは仏様から見られた煩悩のやまない迷いの凡夫の私どものことです。凡夫の私たちに「ただ仏を称えよ、仏名を称えよ」との阿弥陀仏の仰せです。すなわち「我が名を称えよ。外に何もいらない、そのままなりで助ける」という阿弥陀仏の広大な大悲の仰せで、これは阿弥陀仏の本願の中心である第十八願「念仏往生の願」のお心です。

これについてささやかな私の経験に沿って少しお話をさせていただきます。私は現在大谷派寺院の住職をしていますが、生まれは寺院ではなく全く無宗教な一般家庭に生をうけました。ところが高校時代に精神的に非常につらい状態になったのです。それは私と外の世界の間に透明な厚いガラスで囲まれたような心の状態になり、外の世界と自分が離れてしまって生きている実感が乏しくなったのです。非常にうっとうしく寂しい状態になりまして、これをなんとかしなければならないということで、宗教書をいろいろ読んでいる内に、やがて真宗の本を読むようになり、お念仏は「除苦悩の法」・苦悩を除く法であると説かれていることから、お念仏を申すようになりました。そしてお念仏の教えを学ぶべく大谷大学に入って真宗学を学び、そして卒業後、東本願寺の研修部の同朋会館に勤めたりしましたが、なかなかこの問題は解決できませんでした。ところでこの同朋会館の門衛をしていた方で木村無相という、お念仏をしながら一途に聞法している方がおられました。この木村さんは二十才ごろから自分の心の醜さが問題になり、この煩悩を何とかしたいということで道を求め、真言宗の高野山でも厳しい修行をされたのですが、どうしても煩悩はなくならず、とうとうあとは浄土真宗しかないということで、五十八才の時に、東本願寺の同朋会館の門衛になって念仏聞法に励まれました。その頃の、木村さんの作られた詩に

「道がある　道がある
　たった一つの道がある
　ただ念仏の道がある
　極重悪人唯称仏」

とありますが、この詩にはその頃の木村さんの心境がよく表わされています。この詩のお心は、道を求めて長い年月がたったが、どこにも道は見出されなくなった。しかるに道に行き詰まっていた私にたった一つ道が与えられていた。それはどうしてみようもない煩悩だらけの私に「我が名を称えよ、そのままなりで引き受ける」という阿弥陀仏の念仏往生の願にしたがう道でした。こうして私にはもうお念仏一つよりほかにはない、となられたのでした。

こういうお話を木村さんは私に何度もしてくださいました。私も沢山の仏教書を読み、仏教学や真宗学の先生方のお話もずいぶん聞き、自分でもいろいろ思索を繰り返してきましたが一向にうっとうしい気分は変わらず、どうすることもできない中で、起こる苦しみを縁として「ただ念仏していくほかはない」となっていましたので、木村さんのお話はありがたかったのです。それから十年以上も経過して、木村さんは七十五才を超えるようになって、お念仏を「称える一つ」から、「我が名を称えよ」の阿弥陀仏の仰せを〈聞く一つ〉というところに転換していかれたのです。一九八四年、七十九才で亡くなられる三日前にお見舞いにいきましたら、重篤の状態で、私に震える手で紙に「生き死にの　道はただただナムアミダ　ただ称えよの　おおせばかりぞ」と書いてくださいました。

「極重悪人唯称仏」のお心は「ただ称えよ」の仰せを聞くばかり。「唯称仏」の「ただ仏名を称えよ」は、称えたら助けるというような、念仏を救いの条件とされるいわれではなく、称えている私どもに「そのままなりで助ける」という、絶対の救いを告げる仰せその

もの、それが「唯称仏」のお心であるといただかれたのです。

こういう思し召しを木村さんから何度も何度も聞かせていただく内に、とうとう私自身がまったく無仏法であり、信心を起こし得ない無信の者であり、疑いだらけの全く救いのない身と知らされました。そしてその時、はからずも称えている南無阿弥陀仏は「そんなものだからこそ引き受ける」という広大な大慈大悲のお心であることを始めて実感しました。私は当時、離れ島の寺院の代務住職をしていましたが、このお心に驚いて、しばらく有難くて泣いていました。やがて心が落ち着いて、夕方でしたが外に出ました。お寺の庭に小さな池があり、そのそばに立っている柳の木を見たとき「ああうつくしい」と、はじめて見るように感じました。不思議にもそれ以後、今まで透明なガラスで蔽われていたような心のカベが落ちてしまって、外の事物を直に感じるようになりました。こうして人生の根本気分が変わり、真宗の教えがよく分かるようになりました。南無阿弥陀仏はつねに私と「ともにいたもう」阿弥陀仏ご自身のお声であるとも知らされました。

こうした経験から正信偈の「極重悪人唯称仏」というお言葉は「救い」そのものの言葉であるとともに救いへと導き入れてくださるお言葉でもありました。真宗の教えを聞き始めた頃、自分の心に困っていた私に「極重悪人唯称仏」のお言葉は「どうしてみようもない汝よ、ただ南無阿弥陀仏と称えるばかりでよい」と受け取られ、思わず南無阿弥陀仏を称えたとき、ふっと心が少し楽になりました。それが縁で念仏申すようになり、この念仏が私の問題を解決してくれるのではなかろうかという希望が生まれ、それ以後お念仏を申しつつ真宗の教えを専ら聞くようになりました。ささやかな経験でしたが、これが真宗の門に入る大きなきっかけになったのでした。単にお話を聞いたり本を読んだりしただけでは真宗に入ったかどうか分かりません。お念仏を実際に称えることによって「ああこれはいい」ということは私にとって浄土真宗に入る大事な出来事でした。

話は変わりますが、私の知り合いで青山学院を出た後、人生の問題にぶつかり、悩みに悩んで日本中を放浪していた人がいて、彼がたまたま福井県の永平寺に行って初めて坐禅を経験したら、これはいいとなって、それから極めて熱心な禅の修行僧になった人がいます。やはり行は仏道に入る大事な縁だと思います。浄土真宗にお念仏の行があることは真宗にとって大きな意味があると思います。坐禅にしても称名念仏にしても、行すなわち行動することは、思いでガチガチになって苦しんでいた状態から、一瞬なりとも、その思いを手放しにしてくれる効能があるのです。これはだれでも日常の上で経験できることで、頭を抱えて悩んでいるときに、「考えても駄目、そのまま掃除をせよ、物をかたづけよ」と聞いてそのままスッと行動するとき、がんじがらめの思いから一時的ですが解放されるのです。ただこれはまだ、明確に思いを超えている事実そのものに目覚めてはいません。けれどもその時にふっと心が軽くなるものです。

そのようにお念仏を称えるだけでもそこにホッと一息つくのです。無論それはまだご信心を頂いたとはいえないのです。まだ称えているお念仏がそのまま救いの言葉であることが知られていないのです。しかしお念仏を称え始めた一声のところに実はすでに阿弥陀仏の救いは来ているのですが、それはすぐにはなかなか分からないのです。

ところが聞法を重ねていきますと、自分の方に救いができてくるかといえば、そうではなく、いよいよ自分は「救いなき身」「助かる縁も手がかりもない身」であることを身にしみて知らされるのです。ただこれは聞法しないと分からないものです。いよいよ「助かる縁無き身」「無知無能の身」と知らされるのですが、実はそこにおいて「極重悪人唯称仏」の真意、すなわち「そんな者を」「まるまる引き受ける」というお心が知らされ、はじめて阿弥陀仏の摂取にあわせていただくのです。それは正信偈の「極重悪人唯称仏」のお言葉の次に「我亦在彼摂取中」とありますように、私もまた阿弥陀仏の摂取の中におさめられている身であること、煩悩の身でありながら阿弥陀仏に離れない身であることを知らされるのです。いわば阿弥陀仏は私のいのちの主（あるじ）であることを知らされる、これが真宗の救いでありましょう。

以上、いろいろ申しましたが、このようなことから「極重悪人唯称仏」のみ言葉は非常に有難いお言葉であると感じております。

（了）

# 信仰夜話

鳥取県にいた真宗の妙好人として有名な足利源左さん（1842 ～ 1930 年）の言葉から学びます。言葉の出典は、柳宗悦・衣笠一省編『因幡の源左』（百華苑刊）です。

＊　＊　＊

源左さんのお話に次のようなのがあります。

**二瀬川、「おつつあん、どんなつまらぬ客僧でもえゝかいのう」**

**源左、「お説教の間に、一辺でも助けるつちゆうことさへ云はれりゃ有難いがのう」**

これは、その地方の力士であった二瀬川という源左さんに親しく仏法を聞いていた真宗の聞法者の質問ですが、あちこちの真宗のお寺で、いろいろな説教師の説教を聞く中での質問です。「真宗の学問や人徳も乏しく、社会的地位も低い、いわば平凡な説教師さんのお話を聞いてもいいものですか、かえって迷いはしませんか」というような質問だったと思います。それにたいして、源左さんは、説教する人の学問の有無や社会的地位などは問題にせず、その説教師さんが阿弥陀仏のお助けをそのまま説いて、「南無阿弥陀仏は汝を助けるとの仰せ」であるということ、それを説いてくださればそれだけで有難い、と言われるのです。

これはなかなか言えないことです。布教師さんが真宗の学者であるかないか、人気のあるお方かどうか、本山での地位のある方かどうか、住職であるかお手伝いの僧侶かどうか、そんなことは一切問題ではなく、お話しくださるお方が、阿弥陀仏の救いをストレートに一言でもお説教の間に語る人ならそれで良い、それを聞けば良いといわれるのです。聞法者の中には説教してくださるお方が大学の教授であるとか、和上さんであるとか、評判が良い先生であるとかを目安にして、そのような人の話しか聞かない人もいます。しかし源左さんは、そういうことを一切言わず、阿弥陀仏の救いを一言でも告げてくださる人なら、どのような説教者でも良いといわれたのだと思います。

逆に言えば、どれほど学歴の高い先生の法話でも、阿弥陀仏の救いを告げないような説教には、源左さんは不足だったと思います。このことはお説教をする人も考えなくてはならないことだと思います。又、

**源左が二瀬川に**
**「念仏称へさんせよ」**
**と云ふたので、**
**「なんになるだいのう念仏称へて」**
**と詰ると、源左**
**「こんつあん（お前）は、ありがたあなあても、聞く人が念仏称へ出すけんのう」**

というのがあります。「お念仏申しましょう」とお勧めしても、「分からんのに称えて何になるのか」とか「有難くもないのに称えてもしかたがない」などと疑問を持つ人がいます。しかし、阿弥陀仏や釈尊は「分かっても分からなくても、まず称えていけよ」とお勧めなさるのは、一声のお念仏は、阿弥陀仏が南無阿弥陀仏となって「助ける」と喚びかけてくださる言葉であり、阿弥陀仏が共にます徴（しるし）であるから、今すぐには分からなくてもお念仏を称える生活をすることによって道が開けてくる、というのが基本のお勧めで、これが一番大事な意味ですが、ここではもう一つ、お念仏のお心が分かっても分からなくても、有難くても有難くなくても、お念仏を申していくと、それが自ずから他者にも浸透して、不思議にもお念仏を称える人が出てくるものだ、と源左さんはいわれるのです。もちろんお念仏のお心を頂いての上のお念仏は人に伝わりやすいですが、たとえお念仏のお心が未だ分からなくてもともかくもお念仏を申す生活をしていると、そのお念仏自体の功徳のはたらきによって周りの人に自ずから伝わり、念仏する人が出てくるものだといわれるのでしょう。源左さんは南無阿弥陀仏のおはたらきの偉大さ、そして称えることは自ずと阿弥陀仏のお心に叶うことを身にしみて感じておられたのだと思います。

（了）

## 《住職雑感》

最近は「国を護る（国防）」とか「国益のため」という言葉が盛んに飛び交う。しかし、国防とか国益のためと言えばそれで平和が来るとは思えない。今のウクライナの戦争も、「西側の国から〈ロシアを護る〉ためであり、ウクライナはもともとロシアの領土だったので〈国益のため〉に行っている」とプーチンは言う。ロシアに限らず、ほとんどの戦争はこの二つの名目で行われてきた。平和はこのスローガンで実現するとは思えない。人も国も利己的だからである。「共に生きる」という共生の思想が根付く必要がある。